

前回の議論を踏まえた課題の整理について

1 運営主体について

○国立のぞみの園は、現在、独立行政法人として運営しているが、今後、運営主体についてどう考えていくのか。

<第1回検討会における関連する構成員の主な発言>

- 民間の社会福祉法人、社会福祉施設が全部受けてしまっていないかという極端な考え方の構図がある一方、今の独立行政法人という立て付けを維持しているというのは、やはり、それなりの政策的な意味があるのではないか。
- 独立行政法人という立て付けの中でしがみついている必要があるのか、もう少し緩やかな形で国の関与の中でもっと民営化を進めるべきなのか、もっと、逆に国立のほうに引き戻してしまうのかということも含めてゼロベースで、ものごとを考えるべきなのではないか。
- 例えば、入所部門については、わざわざ国がやっていなくてもいいのではないかというスタンスで、のぞみの園の入所、施設サービスの提供ということにおいては、他の社会福祉法人でも、その役割を十分担える状況。今は社会福祉法人も実力を付けている所が結構あるので、できるのではないか。

2 事業体系について

○国立のぞみの園は、現在、原則として新規入所を受け入れていないが、今後、どのような事業体系が相応しいのか。

<第1回検討会における関連する構成員の主な発言>

- 必要な施設入所支援がある中で、こういう組織でなければできないような施設入所支援というものもあるはず。そういう意味で考えると、何も新規入所はゼロでなければいけないというテーゼ(命題)をいまだに金科玉条に持っているべきなのかどうか。
- のぞみの園が果たしている機能とか政策的な役割とか、全体の福祉、施設、サービスの体系の中における位置付けがしっかり位置付けられないと、単なる金の計算だけの議論に陥ってしまうのではないか。
- 交付金が出ているということは、国でしかやれないことがあるのではないかと。これはどう考えるかというのは、もちろん根本的な問題。その前提において考えないと、のぞみの園というものの今後の将来という姿はないのではないか。
- 国がやるべきことは、全国の知的障害の方の支援のためという前提がなければならないということ。これをやるという意味は、まさにモデル的な実践を通して、難しい人の支援の実践をすること、その情報を提供することによって、我が知的障害者分野において貢献するものである。

3 地域移行について

○国立のぞみの園は、今後も、地域移行を推進すべきか。

<第1回検討会における関連する構成員の主な発言>

- 地域移行が鈍化しているという状況があるが、例えば、地元の出身地の入所施設で受け止めるキャパが今のところないという状況もあるのではないか。
- 入所者の削減、地域移行の推進という障害福祉計画を国が定めている限りは、どのような重い障害の方も引き続いて地域移行を前提にしなければ、前提としては成り立たない。
- 御本人が重度だから地域移行できないのではなく、受皿の社会資源がないからという考え方が正しい。入所者がいなくなるのを待って閉鎖とかということではなくて、前向きに地域生活ができるよう行政で支援していただきたい。
- これからは地域で支えていこうという基本的な理念の大きな転換を図ったことをなかったことにして、昔に戻ることはあり得ない。それは、この議論の前提にしないといけない。

4 調査・研究について

○国立のぞみの園は、今後、調査・研究をどのように進めるのか。

<第1回検討会における関連する構成員の主な発言>

- 支援が困難な人たちの最小限のフィールドをもって、支援の方法論を調査・研究と一緒にしながら全国のために国として発信していくべき。
- 研究については、本当に現場を抱えた研究と大学の研究室での研究はリアリティーが違っているが、のぞみの園の入所者と、これから担うべき研究の中身が本当に利用者の実態とマッチングする研究は何なのだろうか。例えば、研究部門だけ切り離して独立行政法人として引き続きやっていくのも1つのアイデアなのかもしれない。

5 その他

○上記 1 から 4 までの事項の他、検討すべき事項があるのではないか。

<第1回検討会における関連する構成員の主な発言>

○ある一定の政策目標を達成するためのコストだということであれば、何も目くじらを立てて減らすものではなくて、その政策に意味があるのであれば、それは、むしろ胸を張って支出すべきものではないか。